

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00602

研究課題名（和文）ラオス・ポンサーリー県におけるチベット・ビルマ系危機言語の研究

研究課題名（英文）Study of the endangered Tibeto-Burman languages in Phongsali Province, Laos

研究代表者

加藤 高志 (Kato, Takashi)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：20377766

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ラオスのポンサーリー県で話されているチベット・ビルマ系の言語のうち、消滅の危機の度合いが高いと考えられた3つの言語、ポンセット語、クー語、ワニュー（ムチ）語を対象に、言語調査を行った。その結果、ポンセット語はブンヌア郡の村では流暢に話せる話者は8人しかおらず、消滅の危機の度合いが高いことが分かった。クー語は、世代間の継承は行われているものの、言語的には6つの変種に分かれ、各変種の話者数は300人程度から860人程度と少ないことが分かった。ワニュー（ムチ）語については、世代間の継承が行われていること、そしてクー語とは異なり村ごとの言語的変異が小さいことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラオスのチベット・ビルマ系の民族のうち、アカ族とブーノイ族は、国家によって多くの下位集団が認定されており、言語的にも非常に多様である。本研究では、アカ族の下位集団のうち人口が少ないクー族とムチ（自称はワニュー）族、そしてブーノイ族の下位集団のうち人口が少ないポンセット族を対象とした。これら3つの言語は、詳細がよく分かっていなかった。消滅の危機に瀕しているのであれば、言語が消滅する前に記録しておく必要があった。本研究はそのための一歩である。

研究成果の概要（英文）：This study conducted linguistic fieldwork on three presumably endangered Tibeto-Burman languages spoken in Phongsali Province, Laos: Phongset, Khir, and Wanyeu (Muchi). The results revealed that in a village of Bunneua District, there are only eight fluent speakers of Phongset, indicating a high degree of endangerment. For the Khir language, although it is being passed down through generations, it is divided into six linguistic varieties, with the number of speakers for each variety ranging from about 300 to 860, indicating a small speaker population. Regarding Wanyeu (Muchi), it was found that the language is being passed down through generations and, unlike Khir, exhibits little linguistic variation between villages.

研究分野：言語学

キーワード：ラオス 危機言語 チベット・ビルマ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の調査により、ラオスのチベット・ビルマ系の民族のうち、アカ族とプーノイ族は、言語的に非常に多様であり、複数の言語からなることが分かっていた(加藤 2009:140)。そして、プーノイ族の下位集団であるボンセット族は人口が極めて少なく(推定人口約数百人)かつ、その言語は、プーノイ族の多数派下位集団の言語であるプーノイ語とは大きく異なるということが分かっていた(Shintani, Kosaka and Kato 2001:66)。また、アカ族の下位集団であるクー族も人口が非常に少なく(推定人口約 3000 人)かつ、その言語は、アカ族の多数派下位集団の言語であるアカ語とは大きく異なっており、さらに、言語的にいくつかの変種があることも分かっていた。また、同様にアカ族の下位集団であるムチ(自称はワニユ)族も人口が非常に少なく(推定人口約 3000 人)かつ、アカ族の多数派下位集団の言語であるアカ語とは大きく異なっていることが分かっていた。この 3 つの言語の研究の進展状況は少しずつ異なるが、全体としては、基礎的な音韻分析、文法分析の途中という段階にあった。また、危機の度合いが高い危機言語は、その地域の多数派言語から多大な影響を受けることが多い。このため、言語接触の状況も明らかにする必要があった。

2. 研究の目的

以上の状況を踏まえて、本研究では、(1)ボンセット語、クー語、ワニユ(ムチ)語を対象に、語彙調査、文法調査、テキスト収集・分析を行うことにより、3 言語の全体像を捉える記録を行うこと、(2)この 3 言語の周辺で話されている多数派言語の語彙調査を行うことにより、3 言語の言語接触の状況を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究が対象とする言語の研究の進捗状況は言語によって異なっていた。そのため、それぞれの言語の研究の進捗状況に応じて、調査を行った。303 項目の語彙調査票は Kingsada and Shintani (1999)のもの、866 項目の語彙調査票は Bradley (1979)のもの、約 2600 項目の語彙調査票は Shintani (2014)のものをを用いた。文法調査票は、研究代表者が作成した基礎的な文法調査票を用いた。

2019 年度は、2019 年 8 月に 22 日間調査を行った。調査した言語は、ボンセット語、ワニユ(ムチ)語、そしてボンセット語の周辺で話されている多数派言語であるアカ・ヌクイ語である。ボンセット語については、ブンヌア郡の NA 村で、未調査の話者 PB に対して調査を行った。話者 PA で収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行いつつ、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。加えて、866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。さらに、基礎的な文法調査票を用いて文法調査を行った。ワニユ(ムチ)語については、ブンタイ郡の TA 村において、未調査の 2 名の話者(話者 WA と話者 WB)に対して調査を行った。話者 WA に対しては、他の話者で収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行いつつ、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。加えて、基礎的な文法調査票を用いて文法調査を行った。話者 WB に対しては、他の話者で収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行いつつ、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。加えて、866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。アカ・ヌクイ語については、未調査の 1 名に対して調査を行った。他の話者で収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行いつつ、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。

2020 年度と 2021 年度は新型コロナウイルス感染症の流行により調査を行うことができなかったが、2022 年度は、2022 年 8 月に 21 日間、2022 年 12 月から 2023 年 1 月にかけて 10 日間、2023 年 3 月に 19 日間、調査を行った。調査した言語は、ボンセット語、クー語、ワニユ(ムチ)語、そしてワニユ(ムチ)語の周辺で話されている多数派言語であるアカ・チピャ語、アカ・ブリ語、ホー語、ルー語、ボンセット語と同じ村で話されているプーノイ語、アカ・ヌクイ語である。ボンセット語については、2019 年 8 月の時の話者 PB が死去していたため、話者 PA に対して調査を行った。収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。加えて、約 2600 項目からなる語彙調査票を用いて調査を行った。さらに、基礎的な文法調査票を用いて文法調査を行った。また、今まで調査をしていたブンヌア郡の NA 村の他に、ポンサーリー郡にもボンセットの村(PHA 村)があることが判明し、その村でも調査を行った。PHA 村では、話者 PC に対して、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、そのチェックを行い、866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、約 2600 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、基礎的な文法調査票を用いて文法調査を行った。加えて、物語を収集した。クー語については、4 つの村において、それぞれの変種の調査の進捗状況に応じて語彙調査と文法調査を行った。ワニユ(ムチ)語については、TA 村において、話者 WA に対して、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、約 2600 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。また、話者 WB に対して、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、866 項目からなる語彙調

査票を用いて語彙調査を行い、そのチェックを行い、約 2600 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、基礎的な文法調査票を用いて文法調査を行った。加えて、話者 C において物語を収集した。アカ・チピャ語とプーノイ語については、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。アカ・プリ語とホー語については、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。ルー語については、866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。アカ・ヌクイ語については、収集済みの 303 項目の語彙のチェックを行い、866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、基礎的な文法調査票を用いて文法調査を行った。

2023 年度は、2023 年 8 月に 19 日間、2023 年 12 月から 1 月にかけて 9 日間、2024 年 3 月に 14 日間、調査を行った。調査した言語は、ポンセット語、クー語、ワニユ(ムチ)語、そしてポンサーリー郡のポンセット語の周辺で話されている多数派言語であるプーノイ語、ワニユ(ムチ)語の周辺で話されている多数派言語であるアカ・オマ語、アカ・ウパ語、ラーオパーン語である。ポンセット語については、ポンサーリー郡の PHA 村において、話者 PC に対して収集済みの 866 項目の語彙のチェックを行い、未調査の 1 名の話者(話者 PD)に対して 303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。また、ポンサーリー郡にはさらに 1 村ポンセットの村(PHB 村)があることが判明し、その村でも調査を行った。PHB 村では、話者 PE に対して 303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、そして 866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。クー語については、7 つの村において、それぞれの変種の調査の進捗状況に応じて語彙調査を行った。ワニユ(ムチ)語については、TA 村において、話者 WA に対して、収集済みの 866 項目の語彙のチェックを行い、約 2600 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。また、ブンタイ郡の他の 6 村のワニユの村においても、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。プーノイ語については、2 村において 303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。アカ・オマ語については、2 村において 303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。アカ・ウパ語とラーオパーン語については、303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。

4. 研究成果

本研究の開始前は、ポンセット族の村はポンサーリー郡のブンヌア郡に 1 村あることが分かっていた。調査を始めてみると、ポンサーリー郡にさらに 2 村あることが判明した。ブンヌア郡の村においては、ポンセット語を流暢に話せる人は 8 人しかおらず、消滅の危機の度合いが高いことが分かった。また、かなりの数のポンセットの人たちがいくつもの村に移住をしていて、それらの村では少数者になっていることが分かった。クー語については、現在あるすべての村で調査を行うことができた。その結果、クー語の世代間の継承は行われているものの、言語的には 6 つの変種に分かれ、各変種の話者数は 300 人程度から 860 人程度と少ないことが分かった(Kato 2023)。ワニユ(ムチ)語については、世代間の継承が行われていること、そしてクー語とは異なり村ごとの言語的変異が小さいことが分かった。

<引用文献>

Bradley, David (1979) *Proto-Lololish*. London and Malmö: Curzon Press.

Kingsada, Thongphet and Tadahiko Shintani (eds.) (1999) *Basic vocabularies of the languages spoken in Phongxaly, Lao P.D.R.* Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

Shintani, Tadahiko, Ryuichi Kosaka and Takashi Kato (2001) *Linguistic survey of Phongxaly, Lao P.D.R.* Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

Shintani, Tadahiko (2014) *The Riang language*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

加藤高志 (2009) 「チベット・ビルマ系諸語」新谷忠彦・クリスチャン・ダニエルス・園江満(編)『タイ文化圏の中のラオス：物質文化・言語・民族』139:166. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Kato, Takashi (2023) Linguistic varieties of Khir in Laos. 56th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Takashi Kato |
| 2. 発表標題 Linguistic varieties of Khir in Laos |
| 3. 学会等名 56th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Takashi Kato |
| 2. 発表標題 Sociolinguistic aspects of Phongset in Laos |
| 3. 学会等名 57th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会) |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|